

「門真っ子」理念と学習支援計画書（提案1）

2006/1/7 事務局 前原耿之

I. 理念的なこと ————— 「門真っ子」のめざすこと

① 「門真っ子」初年度を振り返って

「子ども（生徒）が学ぶ」を支援することを理念として「門真っ子」を進めてきましたが、実際には、子どもに学力をつけよう、少しでもプリントを解いていこうとする学力補足的な支援になっていたのではないかと考えます。

その実態から「学習のあり方・進め方」に対して、私たちの中から、いくつかの意見が出され、「学習支援とは何か」改めて、考えていこうとしています。また子どもたちの様子を見て、ある子どもは休みがちになり、ある子どもは自分ができないレベルの問題は手をつけようとしなかったり、またある子どもはとにかくプリントを仕上げたてしまうことに一生懸命で、プリントが終わればもうしないといったこともあります。

だが、6月頃に比べて、子どもたちは良く問題に取り組むようになっていきます。だんだんわかってきている喜びを顔に表す生徒も多くなりました。「門真っ子」で見せる子どもたちの表情は全然悪いものではありません。‘来る’‘来ない’は、ほとんど子どもの意志で決まっているように思われます。でも「門真っ子」への子どもたちの出席状況はすごくいい。学習態度もいい。手厚く教えてもらえるという理由もあるのでしょう。よくがんばります。当初予想したよりもずっといいのです。私たちとも親しさを増して、いい間柄になってきています。12月17日の学期最終日、子どもたちに感想を求めると『NPOの先生は優しくてわかりやすかった』『楽しかった』『いろいろあったけど、がんばれた』『休み時間がおもしろかった』など、おおむね好評でした。

沖田先生・山先生に代表されるような、たとえていえば、楽隠居が、日当たりのいい部屋で、童心に帰り、孫の面倒を見るのとよく似たまなざしが、このような感想となったと思われます。また現役の先生方も、教室とはちがった優しさが漂っていたように見受けられました。

「分からないことを教える」「分からないから教える」ことは、それはそれで大切なことで、また門真の子どもたちの学力補充にとって必要なことです。

私たちも門真の教師として学校現場の苦労は身にしみていますから、実効・即効ある取り組みがNPOでなされるのは、万言より意味があります。その実情をよく理解した上で、でも、私たちが目標とすることは、学力補充・補完とは少し違っているのではないかと。このまま続けていっても悪いということはないのですが、このまなざしを持ちながら、学習支援とは何か。実践の具体化のためにどうすればいいのか。さらに話し合っていきたいと思うのです。

② 出発の理念・現状への問いかけ

私たちは「学校」とも「塾」とは異なるということの一つ出発点としてきました。存在として考えれば、NPOは、もちろん教育法制上の存在である学校とも、資本

制企業としての存在である塾ともちがいます。私たちは「門真っ子」での仕事に労働報酬を求めてはいません。私たちはボランティア団体です。また、学校は指導要領に定められた「教科内容の履修（学力保障）」を目的にし、塾は「学力販売」を目的としています。私たちの目的は「学習支援」です。どちらにしても、初手からの取り組みとなります。課題が「どんな存在であるべきか」ということと共に、「学習支援」にあるのは明らかです。

「会報」第二号で青木先生はこの点に関してこう書かれています。“現行の学校教育の中では、異なりを排除しつつ、いわば同化の方向をたどっていかざるを得ない。そんな中で、NPOの活動をどう創るかが問われる。NPOの準備会を立ち上げた理念として、学校教育の延長ではない、塾でもない、「できる・できない」は問題としない。などを出発点として今後のありようを模索すると言うものであった。たどり着けるのは、「人はみな違っている、その違った個性とどう向き合えるか」と言うことを理念に据えるべきではないかと言うのが私の主張である。・・・学力不振とされる子どもも限りなく普通の子どもに近づける取り組みが必要なのか、彼らなりの能力を開花させるような取り組みを創るべきか・・・”

この青木先生の問いかけが、アメリカのチャータースクールとの交流、JSステージにおける長年の研鑽やご苦労の上に立っての問いかけであることは分かります。だが、この大きな問いかけに、今、すぐ、合意に至った答えは私たちにはありません。また、門真で障害児教育に携わって来られた北橋先生の『それぞれの生徒が自分のやりたいことを学習するのがいいのではないか』という、提起にも答えられてはいません。現実には、私たちは実践上の方法論も従来の、学校で、慣れ親しんだものの上に築くことから始めるほかはありませんでした。

このような問いかけや提案に対して、私たちがその答えを得るのは、まだ先のことです。今、応えられることは、「何かを始めること」「どこかを変えること」で、その答えを発見できる場にこのNPOをしていきたいということです。

③ 学ぶ意味と学習支援

私たちが学ぶのは大きく言えば二つ考えられます。一つは自分のためです。学校での学習だけでなく、小説を読んだり、映画を見たりすることを含めて、大きく”学ぶ”と捉えると、学ぶのは自分のためです。自分の生き方を考える。人生の意味を探ろうとする。自分の心の悩みに答えを見つけたい。このような、自分が自分であるための、自由で自分の学びというのが一つでしょう。普通「人格形成」とか「自分探し」といわれている学びです。

もう一つは自分と社会のための学びです。*社会的な自分ということになるでしょうが、仕事のために学ぶこと、新聞を読んだり、法律を学んだり、そんな事は社会生活を営む、社会の中の自分、社会と関わる学習です。現実にはこの二つは、はっきりと区別できなくて、お互い交錯していますが、分ければこの二つということになるでしょう。

小、中学生が学ぶのも、もちろん自分のためです。『人の役に立つ人間になりたい』

『夏目漱石を読みたい』『演劇をやりたい』などは、自分自身のために学ぶという側面が大きい学びです。村上龍の「13歳のハローワーク」を多くの中学生が読むのも自分のためです。他方、高校また大学へ進学し、将来の仕事に役立つ知識を得たり、実験を繰り返す、こんな学びは、社会的な自分の学びと考えられるでしょう。

学習とはこの二つと考えられます。どちらも欠かせません。時代は生涯学習の方向を指しています。

子どもたちの学ぼうとする力、欲求は体の奥深く内在していると考えられます。

では、子どもたちの学びを支え、学びを推進していくために何が必要なのでしょう。自分で学んでいく力。学習習慣を身につけ、自立して学んでいくこと。・・・このようなことは何によって可能となるのでしょうか。

私たちは「言葉」と「体」から取り組んでみようと考えているのです。

*『13歳は二度あるか』（吉本隆明・大和書房）“第二章 社会と関わる、自分を生きる”に詳しくあります。

II. 来年度の学習支援計画案

(1) 学習方法

まず、学習方法です。これはほとんど誰にでもできる方法でなければならない。

① 音読

音読については、最近、斉藤孝さんや川島隆太さんの著書がたくさんあります。川島さんの最近の著書から引用します。『音読には2つの効果があります。1つはその場ですぐに脳の働きがよくなること、2つめはずっと続けると前頭前野が毎日フルに活動するので、脳の潜在能力がアップすることです。つまり、ウォーミングアップ効果と同時に、長期的に頭をよくする効果も望めるのです。しかも音読を続けていくと、記憶力がアップすると考えられます。ある程度まで上がると、次になだらかな時期がきますが、そこでもっと努力をすると、停滞を破ってさらに上昇するのではないかと考えられます。』

(『脳を鍛える新聞の読み方』川島隆太・中央公論新社)

私自身は國弘正雄さんの本に影響を受けてきました。國弘さんは日本の英語同時通訳の草分けです。

『当時の私は非常に純真な生徒でしたから、木村先生の言われることを愚直なまでに実効したのです。時あたかも戦争中で、今とは違ってテレビもなければ英語のラジオ講座もない諸事不便な時代でした。しかも英語は敵性語扱いを受けてましたが、幸い教科書だけはありました。そこで、これを声に出して繰り返し読んだのです。おそらく1つのレッスンについて平均五百回、課によっては千回も読んだだろうと思います。・・・ところで私自身の体験に戻りますが、私は中学1年から3年にかけて音読を繰り返し行いましたが、それとともに、英語の文章を読みっぱなしにするだけでなく、自分で手を使って写してみました。「只管筆写」と言っているかもしれませんが、物資が窮乏していた当時のことですから、今日では考えられないような質の悪い藁半紙に、

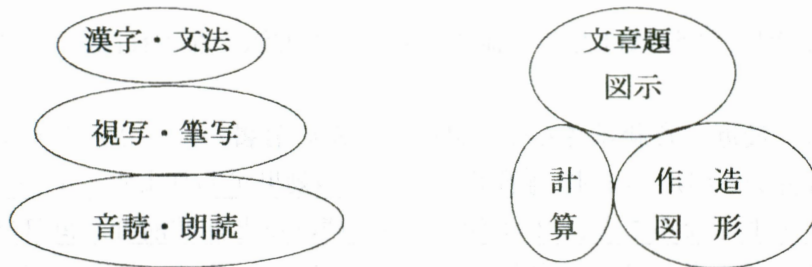
音読し終わった英文をまず鉛筆で書いてみる。あるいは読みながら書いていきました。紙面が真っ黒になるまで鉛筆で書き終わると、今度はその上に赤鉛筆で書くという作業を繰り返しました。』

（『英語の話しかた』（國弘正雄・たちばな出版）

この二人の方は戦前と現在と時代も違います。また専門の学問も異なりますが、「音読」を学習の方法として絶対勧めておられます。でも多分10回20回読んだから何が身に付くということではないと思います。根気よくできるかどうか。まさに「継続は力なり」です。國弘さんが同じ本の中に書いておられます。「基礎の習熟に関して、謙虚になること」が大事です。子どもが自覚できればいいのですが、自覚できないなら、工夫も必要です。

② 視写・筆写

文を音読しながら、ノートにまちがいなく写す。
算数の問題をノートに写す。計算する。作図する。
基本とする学習方法はこの二つです。



③ 課題

「漢字・術語を理解する」「漢字・術語を覚える」「国語問題（文法・読み取り）」「算数文章題」にとりくむ

（2）教材

①日本語教材は言葉によって表現されるものをできるだけ多く扱う。4つの分野で構成する。これを1セットとして数セット用意する。

「小説」教材：国語科書の小説・読みやすい物語・童話など
「説明文」教材：国語教科書説明文・理科・社会科の教科書・ローマ字文など
「新聞」教材：（子ども）新聞記事
「俳句・詩」教材：俳句、近現代詩など

②算数教材は「四則計算」と「作図や造形」「工作」「図示」と文章題。
「藤岡算数教材」をもとにする。

（3）授業

今年度は学校で習ったことの「復習」を本線としてきました。来年度の支援計画でいくとなれば、「どのような進め方をするのか」と藤岡先生の指摘がありました。「ウ

ーン」となりますが、明快な形はまだありません。「一斉授業」も必要となると思われます。テストも必要でしょう。どのような授業にするかは研修課題としてください。授業するにしても「講義」調ではしんどいでしょう。たとえば、「説明は1分を超えない」など参考にしてはどうかと思います。どうなるにしてもこれからです。検討お願いします。

Ⅲ. 言葉・体

「言葉」と「体」についていくつか考察したい。

(1) 言葉

① 言葉のとらえ方・・・吉本文法

『まず、すべての言葉は、「自己表出」と「指示表出」をタテ糸とヨコ糸として織られた織物だとみなすことにする。少し説明する。ここで「自己表出」というのをやさしく解説する。例えば、きれいな花が咲いているのを見て、「きれいな花だ」とか「ああ、きれいだ」と思わずつぶやいたり、心のなかだけで言葉にならず感嘆したとする。もちろん大声で叫んで傍ににいる人々が視線の方向を見た場合でもいい。この場合、他人に伝達するために「きれいな花だ」といったのではなく、思わずその言葉を発したり、内心にいきかせたり、つぶやいたりしたことだけは共通で確かなことだ。言葉のもつこの側面を「自己表出」と名付ける。「指示表出」というのはこの場合、自分だけにしかわからない場合も、傍ににいる人々に花の方に視線を集めさせた場合も、自分または他人に花を指示させたことは確かである。言葉のもつこの側面を「指示表出」と呼ぶ。するとすべての言葉は「自己表出」と「指示表出」の違いがあるが、「指示」の目的が多くて「自己表出」の度合いはそれほど大きくないととか、その反対だとかということが出来る。極端に考えると数字は「指示表出」だけ。胃が痛いのを「痛い」とおもっただけで他人には全くわからなかった場合には「自己表出」だけと考えられるかもしれない。けれどこまかく見れば「3プラス5は8」を暗算するのと、声に出すのと、ノートに記すのとは「自己表出」の度合が違っている。胃が痛いと内心でつぶやくのと、沈黙のままにいるのとは「指示表出」の度合が違う。だから言語はすべてこの両者の織物で、その度合が違うだけだとみなすのが妥当だといえよう。するとすべての言葉は「自己表出」をタテ軸に「指示表出」をヨコ軸にとると次のように表すことができる。』
(『中学生のための社会科』吉本隆明・市井文学)

言葉にはこのような二つの側面、使い方があるという。言葉を理解するということは、この二つの側面において言葉を理解するということになる。この吉本さんの指摘、吉本文法から私たちが学ぶとすると何であろうか。

② 音読における技術

音読。基本的な言葉の習得方法である音読において、ただ声にだして本を読むという所から「自己表出」の度合いが多い言葉や文は、「他人に伝達」するためにそういったのではなく、思わず口に出したり、自分に言い聞かせるためにつぶやいたりしたので

から、それに相応しい読みが考えられる。「指示表出」の側面がほとんどの言葉や文は、それに適する読み方をする。文を分別して捉える。そういう把握に立って読み方を磨いていくという所へと移れるのではないか。

また読み方一つで、その言葉の「自己表出」の側面を多くしたり、また、反対に少なくしたりすることもできる。それは読み手がその言葉をどのように自分に受け入れたかという深さや広がりに関係することになる。

では、具体的に教科書の教材で考えてみましょう。

4年国語教科書・『やい、とかげ』（舟崎靖子「ひろがる言葉」・教育出版）の中に、「ぼく」が、とかげのしっぽをぶら下げて、「なんて原っぱは静かなんだろう。世界じゅうの人たちは、みんな自分の自転車に乗って、どこかへ遊びに行ってしまったんだ。世界じゅうは空っぽ。ぼくは空っぽな世界のまん中に、ひとりぼっちで立っている。」と書かれている。

ほとんど「自己表出」的だと理解してよい。その後、季節感を伴った自然描写と共に、自転車とのぶちゃんとの回想が続く。ここも、伝えようとする側面より、ローソクが遊び道具だった時代、桜の花が日常の場に咲き、ざりがに、どろやなぎ、まつの実、しいの実、どんぐりの実、ふな、こい、たにしが、自然が生きていた時代に、貴重な自転車をなくした悲しみ、喪失感を言葉に表した、心のつぶやきと解したほうがいいのではないか。

自転車は交通手段である。でも「ぼく」にとっては、のぶちゃんとの交流の手段だ。母を含めた世の中の人との交流手段だ。その大切な自転車をなくしてしまった。ひとりぼっちで立っているこの世の静かさ。音読すると、この箇所はどのように読んだらいいのだろうか。子どもがこのようながいに気がついて（つまりはこの作品がよく理解できて）音読するようになるには、相当読みこなさなければならない。

音読する際は、漢字の意味や文章の内容がよくわかっている必要があります。私たちが説明すること、子どもたちが調べたりすることが必要です。また、音読を重ねる中で、分かってくることもあるでしょう。読み手の理解が深まるなかで、読み方も変化することになる。

音読とは言葉や文章表現の「織物」を声で表現することだ、と捉えることもできる。

③ 俳句・近現代詩

荒海や佐渡に横たふあまの川

波高い海がある。佐渡はその海の向こうにある。その佐渡と出雲崎（本土）をつなぐかのように天の川がある。荒れた海。佐渡。天の川。私たちにはこの句に対していろいろな受け止め方ができるし、いろいろあってもいいでしょう。だが、芭蕉自身が心に思ったことはどのようなことだろうか。

『ここでは（「奥の細道」の中では）、格別の解説はないけれど、芭蕉は別にこの句に關して、「銀河の序」と題する一文を書いている。次のようだ。

「北陸道^{ほくろくどう}に行脚^{あんぎや}して越後ノ国^{えちご}出雲崎^{いずもさき}といふ所^{かの}に泊^かまる。彼^{おち}佐渡がしまは海の面^{おも}十八

里、滄波を隔て、東西三十五里によこおりふしたり。みねの嶮難谷の隈々まで、さすがに手にとるばかりあざやかに見わたさる。むべ此嶋はこがねおほく出て、あまねく世の宝となれば、限りなく目出度嶋にて侍るを、大罪朝敵のたぐい、遠流せらるるに よりて、ただおそろしき名の聞こえあるも、本意なき事におもひて、窓押開きて暫時の旅愁をいたはらむとするほど、日既に海に沈で、月ほのくらく、銀河半天にかかりて、星きらきらと冴えたるに、沖のかたより、波の音しばしばはこびて、たましゐ(ひ)けづるがごとく、腸ちぎれて、そぞろにかなしびきたれば、草の枕も定まらず、墨の袂なにゆへ(ゑ)とはなくて、しぼるばかりになむ侍る。」

芭蕉はいう。佐渡島は大自然の恵みとして黄金を産する宝の島だ。これがこの島の本来の姿だというのである。ところが、人間たちの手によって、「大罪朝敵のたぐひ」の流罪の島とされ、汚名が着せられ、けがらわしい島のように忌みきらわれている。あまりにも残念、不本意な姿だ。私の魂は削られ、腸はちぎれるほどである。涙があふれて袂をしぼるほど。悲しみがわたしの中に湧きおこって止まぬ。”人間が己の掟をつくり、『大罪・朝敵』などという汚名を着せつけ、生涯をこの島にとじこめた。ここにとじこめられた人々の歎き、悲しみはいかばかりか。この本土に渡ることを望み、それが空しく人間の掟によってさえぎられてきた。わたしはそれを思うと、魂は削られ腸もちぎれる思いだ。だが、はるか天なる銀河、天の川だけは、そのような地上の掟をあざわらうかのように、この本土側より、あの佐渡島へと差し渡されている。天は銀河をあゝ島の内なる人々へと、荒海の障壁を越えて、横たえつつけているのである”と』
(古田武彦『失われた日本』・原書房)

小学生に芭蕉の歎きや悲しみが伝わるかどうか。芭蕉は、流罪となった宗教者である日蓮、能芸能者である世阿弥の人生の中に、自分の俳諧人生を重ねて見たと思われませんが、小学生には、今すぐ理解は無理な事かもしれません。でも、俳句は民衆的でもっとも短い文芸的な表現方法です。日本文の美である七五調は音読するには優れた教材でしょう。

詩はどうでしょうか。

『・・・ここに挙げた詩人たちの詩作品は、たった一行、あるいは一篇の言葉だけの表現で、読む人によっては、メロデー、長短調、人生体験の個性のすべてが含まれるように作られている・・・』
(『中学生のための社会科』吉本隆明・市井文学)

四人の詩人の作品が紹介されている。そのうちの一つ。

旅上 萩原朔太郎
ふらんすへ行きたしと思えども
ふらんすはあまりに遠し
せめては新しき背広をきて
きままなる旅にいでてみん。

汽車が山道をゆくとき
みずいろの窓によりかかりて
われひとりうれしきことをおもはむ
五月の朝のしののめ
うら若草のもえいづる心まかせに。

この詩に吉本は次のような説明を載せている。『朔太郎の詩はその当時憧れの的だったフランスへ行きたい、そのは文化の花が咲く国だが、行くだけの理解も名目もない心理をまぎらわせる詩作品だ。やさしいが見事に当時の若い日本知識人の文化的憧れを象徴している。』 声に出して読むだけで、癒されると感じる。

④ 新聞を音読する。説明文を音読する。

小説や詩などの文芸作品は読み手に感動を与えたり、癒しをもたらしたりしますが、理科や社会科の教科書や新聞などはそのようなものではない。でも面白さはあるのでしよう。

(2) 体・・・「非宣言記憶」とは何か

① 記憶とは何か

「・・・脳科学者の松本元によれば（『脳・心・コンピューター』松本元・丸善）、心は、「知」「情」「意」「記憶と学習」「意識」の五つから成るといふ。・・・「知」は、英語でいうと **intellect**。知性、知力といった意味だ。見たものや思い出したものについて考える作用がこれにあたる。

「情」は感情 (**emotion**)。専門用語では感情と情動を区別するが、ここではわかりやすいので感情ということにする。「意」 (**volition**) は意図や意思決定をする働き。考えをまとめて話したり、行動したりする、ドライビングフォースだ。ご存じのように、三つあわせて「知情意」といふ。そして、「知情意」をうまく働かせるためになくはないのが「記憶と学習」だ。「記憶」 (**memory**) はもちろん、覚えること。心理学の用語でいうと、「記憶」には宣言的記憶 (**declarative memory**) と非宣言的記憶 (**nondeclarative memory**) がある。文章のような記憶やイメージを使って表せる (宣言できる) 記憶と表せない記憶、という意味だ。宣言的記憶にはエピソード記憶 (**episodic memory**) と意味記憶 (**semantic memory**) がある。エピソード記憶とは、日記のようなもので、自分がいつ何をしたかをエピソードの連続として順番に覚えていく記憶だ。私たちは、今朝起きてから何をしたとか、この前の旅行に行った時に何をしたとか、体験を思い出すことができる。もちろん、忘却するので、すべてではないが・・・。

意味記憶は、辞書のようなもので、モノやコトの意味の記憶だ。時系列とは関係なく、リンゴとは何か、色とは何か、心とは何か、というようなことを、私たちは定義として覚えることができる。エピソード記憶がもとになって意味記憶が形つくられるのではないかと、ともいわれている。非宣言記憶は、日記や辞書に書けないような記憶。

たとえば、練習するとボールをうまく投げられるようになったり、華麗にスキーを滑れるようになったりする。このような、投げ方や滑り方についての記憶がこれに当たる。私たちは、このような場合、「からだで覚える」というが、本当は「脳が非宣言記憶として覚えている」というわけだ。脳の非宣言記憶がよくできていると、と言い換えてもいい。・・・「記憶と学習」の「学習」(learning)の方は、勉強する時の意味記憶の学習や、スポーツをするときの非宣言学習など、要するに、記憶している内容をよりよいものに更新していく働きだ。」(『脳はなぜ「心」を作ったのか』前野隆司・筑摩)

② 二つの記憶・・・「宣言的記憶」と「非宣言記憶」

記憶には二つある。「言葉やイメージによって示す記憶」と「体が覚える記憶」がある、という。そして、表現できる記憶は「日記的な記憶」と「辞書的な記憶」に分類できる。「体が覚える記憶」とは身近で考えれば、例えば、中学生がバッティングを会得するには、最初は緩いボールを近くからほってもらい、バットの出方、足の踏み出し、軸足の使い方など一つ一つを意識してボールを打つ。そして何千回とバットを振る中で、意識しないで、つまり、無意識にバットで打つことができるようになる。こうして初めて試合で生きたボールを打つことができるようになる。「体が覚えるまで練習しろ」とか普段よく言います。池田高校の故郷監督は色紙に“鍛錬千日之行 勝負一瞬之行”と書かれていました。このような記憶を「体の記憶」、専門的には「非宣言的記憶」というのでしょうか。

では、定規を使ってまっすぐ線を引く。コンパスで円を描く。三角形を書く。このような算数の基本の技能も「体」の記憶といえなくはない。だから、基礎的な練習を積む必要があります。「九九」はどうでしょうか。私たちが小学校低学年で身につけた九九はもはや「体の記憶」だと考えられます。

東先生の話ではインドや韓国では二桁のかけ算「九九」を学んでいるそうです。であれば、 $19 \times 19 = 361$ が瞬時に分かることになります。

『20×20はどこの学校でも教えます。インドの子どもはだれでも20×20までは言うことができますね。あとは先生によってちがっていて、技術者になるような人の頭の中で99×99までのかけ算ができるようになります。』

(『二桁のかけ算一九一九』かえるさんとガビンさん著・ライブドアパブリッシング)

③ 学習とは何か

脳科学の立場からいえば、私たちの学習とは、この「意味」記憶や「体」の記憶をよりよいものに更新することだ、という理解です。なるほどと思えるのですが、例えば「人間の文明(社会)の基礎には産業があるのだよ」と理解する。「産業」という言葉の「記憶」を「産業には第一次産業、第二次産業、第三次産業があるのだよ」という「更新」が「学習」である。こうして初めて現代社会を理解する糸口が掴める。

私たちの「学習支援」は、ここで述べられている「更新」のための基礎的な方法を習得し、「体の記憶」をつくるということです。

④ 実在（言葉）と数（数式）の間・・・考える力を鍛える

『算数の文章題は図に表すことができる子どもは解くことができる』と藤岡先生は言われる。

これはどういう事なのか。私の経験でも、4年生の児童Uさんは、ある文章題でその計算式をかけ算にするか、割り算にするかが分かりませんでした。「図にして考えたらどうか」と言いましたが、彼女にはその図がかけません。数字が大きすぎたのでしょう。そこで数字を小さくした問題に変えると、図を描いて、『ああ、割り算か』と気づき、割り算の式を書くことができました。

藤岡先生の指摘は、文章を「図形」や「グラフ」に置き換えて、「中間の形」を作ることができれば、言葉から数字・数式への転換が容易だというふうに理解していいのでしょうか。例えば 2×3 はタテ2よこ3の長方形の面積として図示できる。そうして二分の一 \times 三分の一が六分の一の面積となることが量として具体的に認識できる。

NPO（準）結成の頃、何を学んでいくのか、話し合っていた時に沖田先生が次のように言われたと記憶しています。『リンゴ3つ、蜜柑2つある。合わせていくつでしょう』『答えとして、“リンゴ3つで蜜柑2つ”も正解になる』『だが、果物はいくつときけば5つとなる』と。「なるほど小学生は具体的にものをみるのだな」と中学生だけに関わってきた私には驚きでした。

リンゴと蜜柑は実在の姿として合わず（足す）ことはできない。だが「果物」として、つまり具体からやや抽象に移動すれば合わすことができる。『ここにリンゴが3つ、蜜柑が2つ、ジャガイモが4つある。さて果物はいくつあるでしょう』と問えば一層はっきりする。果物を例えば○で、野菜を△で図示する。数にそれだけ近づいたと考えられる。

現実から数（数式）に至る過程の中間に、「図示」「グラフ」を置けば理解が明快となる。「図」「グラフ」は考える道具です。

IV. NPO「門真っ子」作法

- ①最初に全員で挨拶をする。
- ②机、椅子は生徒が片付ける。それから全員で「さよなら」をする。
- ③鉛筆を使う。鉛筆削りを用意する。国語の辞書を使う。
- ④定規・コンパス・分度器・ノートは自分で用意する。
- ⑤「あゆみ」の中味を変える。
- ⑥毎日家庭で30分音読する。

*下線はすべて前原の方でつけました。

*この文は1月4日、事務局に提案し、ミーティングを経て、書き直したものです。

「門真っ子」学習支援計画（提案2）

2006/2/4 事務局 前原耿之

「門真っ子」学習支援計画（提案1）をもとに、1月7日 拡大事務局会議、1月28日 拡大事務局会議において、かなり長時間、検討・研究を重ねてきました。参加いただいた市教組役員の方々、現職の先生から「子どもたちの様子と学習課題」「取り組みのねらい」「具体化への提案」など学校現場からの意見を聞かせていただきました。私たち自身も試行錯誤とはいえ、一年間の取り組みを共有しております。子どもたちのすごさも指導の不十分さも毎回の反省の中で確認しながらきました。また、このNPOだけでなく、他の教育諸組織に携わっておられる会員の方々から先行する経験をもとに、方向性を示唆していただきました。結果、「学習支援」の具体化の構想までたどり着くことができました。門真の子どもたちの教育に関わってきた誰もが抱く悲願が小異を飲み込んで、一つの形に実を結んだのではないかと感じております。実際の仕事がこれから待っております。ご検討いただき、ご協力よろしく願いいたします。

（1）学習の形について

先日の4年生の学習から考えてみます。詩「かぼちゃのつるが」（原田直友・民衆社）を読んだのプリント学習です。すぐ気づくことは子どもの注意はまず問題にいてしまします。問題文を読む。問題の答えに関係する箇所を詩の中から探す。答えを書く。そして次の問題文へと移る。すべての答えが書けるとホッとしてしまう。「これで終わり」、といった感じです。プリントを使つての学習という一つの典型でしょう。でも、「門真っ子」での学習だからこうなったということではない。今の時代の日本の子どもたちの学習の一つの側面がここに表れていると理解したほうがいいと思います。

ここでは詩を読んで、詩の音韻律を楽しむということはほとんどない。詩全文を覚えようとする気持ちもない。詩の情感に共感することもない。この詩を作った人はどんな人なのか。詩人への興味も生まれては来ない。「問題を解く」「ひたすら次へ進む」学習の姿、その特徴が現れています。もちろんプリント作者は問題をいくつか設定することによって詩の解釈・読解を誘導しようとしています。だが、問題設定は細切れになりすぎているように思える。また、感想を選択する問題では答えとしての感想は一般的で、個性もなく、大人の感想が並べてある。これでは子どもは自分自身の個性的な感想はつぶしてしまう。

仮に答えが全部あつていたとしても、はたしてこれが詩の学習と言えるのだろうか。

根本のところでは違っているように思います。美空ひばりの名曲に「悲しい酒」があります。確か作詩家の石本美由起さんの話だったと記憶していますが『この詩は美空ひばりのためにつくったのではない。でも、ひばりはこの詩を自分の人生に重ねて自分の詩にしてしまった。更にひばりはこの詩を歌うとき、聴衆に聴衆自身の人生を歌っているかのように聴かすことができた。』と言われていました。本来、詩を読む、詩を聴くということはこういうものだと考えます。

詩への共感はそれぞれ個性的でしょう。そのためにもしっかり読み込まなければな

らない。詩そのものを読んで読んで暗誦できるまで読んで、味合おう。これが詩を学ぶ本来の姿・形ではないでしょうか。美空ひばりの歌を聴いて、人が人生の慰めとするのと同じように、そのように学んでこそ詩や俳句、小説、その他の文芸作品が自分の人生の癒しや励まし、支えとなるやもしれない、自分のために学ぶという意味がここにはあります。作者の「人生体験の個性」が詰まっているのですから。

「門真っ子」で見られたような学習の姿とはちがうものを生むことができると考えます。

実際、プリント学習は現在、学校ではむげに否定はできないでしょう。テストもあり、入試もある状況でプリント学習でひたすら答えを求めていくのも一つの勉強方法だということもよくわかっています。でも学校では、そんな学習だけではなく、授業の中で、子どもたちに深く考えさせることもできるし、真理を教えることもできます。

私たちもNPOとして自立して、どんな学習ができるか、どこまでやれるか、分かりませんが、とにかく考えながら進んでいきたいと思えます。

(2) 自発的な学びと自主的な学びについて

北橋先生がいわれる『それぞれの生徒がやりたいことを勉強する』という理想に沿ったものがあるとすれば、それにもっとも近い存在はおそらく図書館でしょう。私の近くの図書館には平日午前中から老若男女がいます。40代の男性はいつもノートにメモをとりながら、必死に本を読んでいます。休日には小学生が絵本を読んだり、漫画を読んだりしています。それぞれが自分の読みたい本を読んでいます。このような学習は自発的といえるでしょう。これも一つの理想と考えられます。そこに行けば自分が学びたい本や教材、そんなものがあるという条件が必要となりますが、私たちもいつの日か、音読図書館のようなものを作ることができれば、このような自発的学習も考えられます。

私たちの場合でいえば、5年生「門真っ子」が、そのように、自発的に学んでいくことができれば理想的と考えます。ピカソやモジリアーニーなど多くの画家はルーブル美術館でデッサンして自分のスタイルを学んだと聞きます。美術館もまた同じ役目を果たすことができるでしょう。

だが、私たちは、今、子どもたちに直接働きかけて、学習支援として何をしたらいいのか。どのような学習の型・方法を体得すべきなのか。そこに焦点を定めて、この道を歩んではどうかというのが提案です。踊りであれ、スポーツであれ、芸術であれ、「型」・「方法」を身につけることが最初の基本です。そのための努力が必要なのは言うまでもありません。学問でも同じです。自分の型をものにするまでは繰り返し、繰り返しやらなければなりません。ここをやりきって次へのステップ＝自主的な学習力をつけることができる。

子どもたちがそんなものを求めて「門真っ子」の門をたたくようになればいいのではないのでしょうか。

(3) 「フィンランドの4年生国語教科書」

(著者メルヴィ・バレ/マルック・トッリネン/リトバ・コスキパー/
(訳者 北川達夫 WSOY社・経済界)

1月28日、藤岡先生からお借りしたこの教科書は日本の教科書と際だった違いがあります。まず目的は「グローバルコミュニケーション力」の養成とあります。

その教育方法は①発想力 ②論理力 ③表現力 ④批判的思考力 ⑤コミュニケーション力と考えられている。

『本書は「考えるための教科書」であって「解答を出すための教科書」ではありません。先生も生徒も、親も子も、問題について一緒に考え、話し合い、解決策を模索するための教科書なのです。「絶対に正しい解答」というのは、最初から存在しないものと考えてください。解答が存在しない・・・われわれ日本人にとっては、なかなか納得のいかない状態です。しかし、フィンランドでは、むしろその納得のいかない状態を重視します。納得できないから、また考える。問題が心のどこかにひっかかっている、考え続ける。とりあえず答えを出しても、さらに考え続ける。こうすることによって、揺るぎない「考える力」を身につけることができるというのである。』

このような説明があります。では実際の内容を目次で追ってみましょう。

- | | |
|-----|-----------------------------------|
| 第一部 | I また会えたね |
| | II 夏休みの思い出 |
| | III 図書館大作戦 |
| | IV 分類しよう |
| | * すいせん図書・ソフィアとハアザミの花・作家のノボラ姉妹・ |
| | 「リスト・ラッパーヤ君」シリーズ・リスト・ラッパーヤ君と |
| | ヒルブリ・テイリ先生 |
| | V からかっているんじゃないよ |
| | * かぎかっこの使い方・作文特訓道場1 |
| 第二部 | I テスト勉強のやりかた |
| | II 読書は楽しいな |
| | * 物語「カラスのチーズ」・物語「よいものは幸せを手にし、悪い |
| | ものはこらしめられる」・物語「ヒツジ飼いとオオカミ」・説明文 |
| | 「犬」・発表しよう・作文特訓道場2 |
| 第三部 | I バスキマキ新聞 |
| | II 手紙を書こう |
| | III ひみつの誕生日 |
| | * きゃくほん「旅びととクマ」・説明文「アハベン」・作文特訓道場3 |

第四部 I コンピューター教室

II 外国からの転入生

III 投書しよう

*すいせん図書「リリー・バケバ」シリーズ・まんが・学級新聞をつくろう・作文特訓道場4

第五部 I ひみつの特訓

II ギネス・ブック

*物語「井戸で糸をつむぐ娘たち」・物語「町ネズミと、いなかネズミ」

本文にはそれぞれ設問があります。その答えに「正答」がないのは上の解説にあったとおりです。読んで思うのは「読書のすすめ」「作文のすすめ」「(自己)表現のすすめ」が本線となっています。発行はWSOY社のようなのですが、意図は明確です。自己形成・自己表現・交流(コミュニケーション)です。設問はそのためのものです。だから「答えはない」となるのでしょう。いや、そうではなくて「正答」はあります。

その場合「正答」と考えられるのは「自分の考え」であることと「その根拠・理由をきちんと表現・説明できること」だと述べておられます。ついでに言うとフィンランドの学校間に格差はないと思われているようですが、格差はあるようです。私たちも地元集中の経験からいえますが、格差のない学校はあり得ない。格差をなくす運動が新たな格差を生むという結果になったのですから。そんな嘘ではなく、フィンランド教育の成功の『秘密』は教科書にあるというのです。『教科書がいいのだ』と言われています。『生徒に考えさせること』を第一義に作られているのです。生徒はもちろんのこと、教師が考えなければならない教科書となっております。

私たちも教材を準備し始めておりますが、算数の教科書も読んでみたい気持ちにさせられました。尚、訳者の北川達夫さんは元フィンランド日本国大使館勤務。著書には「知的英語の習得術」「知的で美しい英語3ヶ月速習秘伝」「知的英語が身につく名文音読」などがあるようです。

(注：かつてはソビエト教育学に、ソ連崩壊後はアメリカの教育理論に「モデル」を求め、「輸入」してきた日本の教育界。そして現在、PISA世界のフィンランド教育に「モデル」を求める。私たちは今、そうしようとしているわけではありません。)

(4) 学習支援と私たちの立場

学習とは二つ考えられます。「自分自身のため」と「社会に関わるため」、この二つです。その学習を支え、推進する力を「言葉」と「体」に求めましょう。音読と視写によって言葉・文を習得し、味わい、体に記憶させましょう。そうして、子ども自身が学習するように支援しましょう。私たちは「教師」ではなく、青木先生の言葉をお借りしていえば、「支援者」という立場に立ちましょう。NPO支援者集団ということで、子どもたちへの支援に当たりましょう。

子どもたちが本を離れ、文字から遠ざかっているとされて久しいです。それにひきかえ、映像・音楽の世界はますます拡大しつつあります。このとき、言葉・文字の世界を音読を通して復権しようとする私たちの試みは適切と確信しますが、すべての子どもが素直に受け入れるとはかぎりません。でも、子どもたちが自ら学んでいこうとする際には、言葉の持つ力は大きい。体の一部となった記憶は学習を助けるでしょう。

言語は第二の遺伝子と言われます。すべての生命はDNAにその記録を残してきましたが、人類だけは同時に言語に生命の記録を残すことができます。そして、現在では、第二の言語と言われるコンピューターが登場しています。

第一言語として日本語・英語、コンピューターを第二言語として身につけることが求められる時代にすでに入っていると思います。

(5) 来年度「門真っ子」について

- ① 国語では「音読する」「視写する」「味わう」(作文する)を主な内容とし、算数では「計算する」「学習用具を使う」「考える」(図示する)を主な内容とする。
- ② この取り組みは来年度募集の新3年生から始める。募集は3小学校から30名とする。
- ③ 新4年生については沖小、五月田小から再募集する。30名。
- ④ 5年生「門真っ子」は現在の4年生「門真っ子」から希望があれば設置する。
- ⑤ 「門真っ子」が親と子どもと私たちの三者によって運営されるように計画する。
- ⑥ 来年度「門真っ子」は新年度が始まった4月12日(水)に募集を開始して4月19日(水)に締め切る。応募児童・保護者には、4月22日(土)10:00 説明会を開く。
開校式は5月13日(土)に予定する。

(6) 教材作成

- 教材編集会第一回 2月25日(土) 1:00～ 書記局
第二回 3月4日(土) 10:00～ 書記局

門真教育支援NPO(準)会員 様

(案)

この一年間ご協力ありがとうございました。現在、来年度に向けて活動の構想をまとめているところですが、自立したNPOとしての活動をするために運営資金を確保しなければなりません。

本年度は、各会員から1,200円のご協力をいただきましたが、来年度は年会費として2,000円の協力をお願いしようと考えています。

今後の年金のゆくえ等を考えますと、甚だ心苦しく思いますが、活動の充実を図るためにご協力方よろしくお願いいたします。

2006年3月2日
門真教育支NPO(準)
代表 沖田 謹三郎

----- き り と り -----

門真教育支援NPO(準)
代表 沖田 謹三郎 様

会 員 登 録 書

私は、2006年度の門真教育支援NPO(準)の会員として、下記のとおり会費を添えて申し込みます。

記

月 日

氏 名 : _____

住 所 : 〒 _____

電話番号 : _____

(できれば携帯番号も: _____)

会 費 : 2, 0 0 0 円